



Title	地理的境界と展示活動：ワイキキ水族館における環境と文化の展示を事例として
Author(s)	水谷, 裕佳
Citation	境界研究, 10, 23-43
Issue Date	2020-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.10.23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78153
Type	departmental bulletin paper
File Information	02.pdf, 本文



[論文]

地理的境界と展示活動

—— ワイキキ水族館における環境と文化の展示を事例として ——

水谷 裕佳

はじめに

本稿では、ハワイ諸島オアフ島のホノルル市に位置するワイキキ(Waikiki)地区における事例を取り上げながら、研究施設、教育施設、展示施設、およびレジャー施設を兼ねる水族館の活動が、地理的な境界の設定によって分断された環境や文化を可視化すると共に、他の施設との連携や、観光客と住民の交流を促し得ることを、文化人類学的な観点に軸足を置いた境界研究の視点から論じる。

水族館は、博物館や美術館と同様に、展示や教育を業務の一環としている⁽¹⁾。展示や教育を担う機関の役割や機能に関する研究は、博物館学という学術分野として確立されており、博物館学の専門家であるゲイル・デクスター・ロードとナイリー・ブランケンバークは、現代の博物館はソフト・パワーの主体としての役割を果たしていると主張する。両者の定義によれば、ソフト・パワーとは、軍事や経済に基づかない方法で人々に影響を与え、一般市民や非営利団体をつなぎ、社会を変革する力である⁽²⁾。本論で取り上げる事例からは、ワイキキ水族館(Waikiki Aquarium)がソフト・パワーの主体として多様な人々や非営利団体をつなぎ、入植者による開発やアラワイ運河の建設によって環境や文化が分断されたワイキキ地区のあり方の再考を促していることが分かる。

1. ハワイの地理的環境とワイキキ水族館

まず、本稿で取り上げるワイキキ地区周辺の現在の地理的環境について説明する。ホノルル市はオアフ島の南東部に位置しており、観光地として知られるワイキキ地区は、ホノルル市の海に面した一角である(図1)。オアフ島東部に連なるコオラウ山脈には多数の溪谷があり、ホノルル市にはマノア溪谷とパロロ溪谷からマノア川(Mānoa stream)とパロ

(1) 鈴木克美、西源二郎『新版水族館学：水族館の発展に期待をこめて』東海大学出版会、2010年、114–115頁。

(2) Gail Dexter Lord and Ngaire Blankenberg, “Introduction: Why Cities, Museums and Soft Power,” in Gail Dexter Lord and Ngaire Blankenberg eds., *Cities, Museums and Soft Power* (Washington D.C.: The AAM Press, 2015), pp. 9–10.

ロ川(Pālolo stream)が流れている。この二つの川は下流で合流し、マノア・パロロ排水路(Mānoa-Pālolo drainage canal)となる。そして、マノア川、パロロ川、マノア・パロロ排水路の流域はマノア・パロロ川流域(Mānoa-Pālolo watershed)と呼ばれている。マノア溪谷の西に位置するマキキ溪谷からはマキキ川(Makiki stream)が流れている。マキキ川は下流の一部を除く部分が人工物で覆われているものの、マキキ溪谷からマキキ川の河口に至る地域はマキキ川流域(Makiki watershed)とされている。そして、ワイキキ地区の北部から北東部の端を3.1キロメートルに渡って流れるのが、1927年に完成したアラワイ運河(Ala Wai Canal)である⁽³⁾。アラワイ運河にはマノア・パロロ排水路とマキキ川が繋がっており、アラワイ運河に沿った地域はアラワイ運河流域(Ala Wai watershed)と呼ばれている⁽⁴⁾。さらに、マノア・パロロ川流域、マキキ川流域、アラワイ運河流域は、合わせて広域アラワイ運河流域(The greater Ala Wai watershed)と称されている⁽⁵⁾ (図2)。



図1 オアフ島

出典：筆者作成⁽⁶⁾

(3) University of Hawai‘i at Mānoa, School of Ocean and Earth Science and Technology, “Ala Wai Monitoring Station,” [http://www.soest.hawaii.edu/oceanography/edecarlo/Eric_Decarlo_homepage/Ala_Wai_Watershed.html] 以下 URL は 2019 年 12 月 21 日現在有効。

(4) State of Hawaii, Office of Planning, Coastal Zone Management Program, *Hawai‘i Watershed Guidance* (Honolulu: Tetra Tech EM, 2010), p. 22 [http://www.reefresilience.org/pdf/HI_Watershed_Guidance.pdf].

(5) Aly I. El-Kadi and Eric Yamashita, “Modeling Streamflows and Flood Delineation of the 2004 Flood Disaster, Mānoa, O‘ahu, Hawai‘i,” *Pacific Science* 61, no. 2 (2007), p. 237.

(6) 地図の作成にあたっては、Google maps [https://www.google.co.jp/maps] を参照。海岸線や山脈の形は簡略化している。

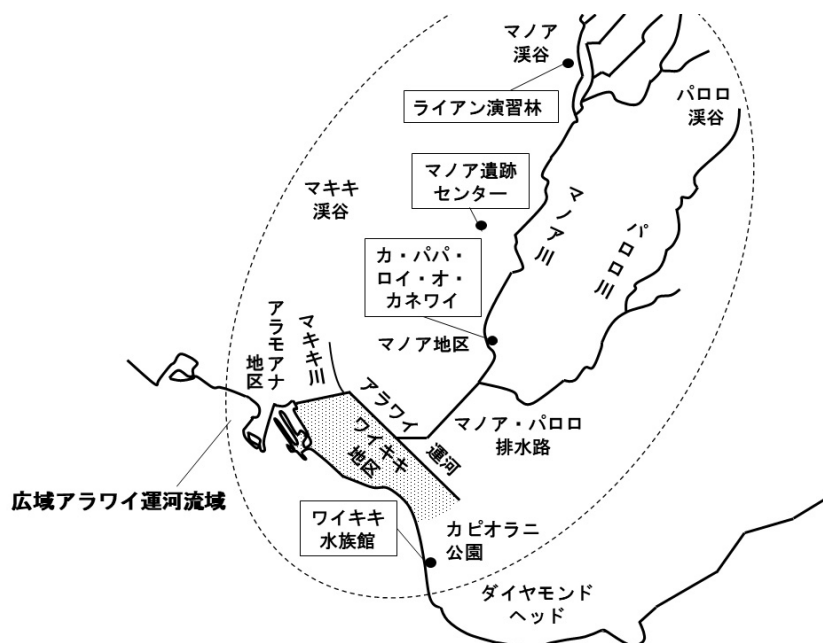


図2 ワイキキ地区周辺

出典：筆者作成⁽⁷⁾

入植者到来以前のハワイにおいて、水は生存のために必要不可欠であるだけでなく、文化や社会を支える要素でもあった。詳しくは後の章で述べる通り、ハワイの先住民であるカナカ・マオリ (Kānaka Maoli) の人々は、土地を川の上流から下流に沿う形でアフプアア (ahupua'a) という区分に分割し、集団的に利用していた⁽⁸⁾。各アフプアアには、アリエ (ali'i) と呼ばれる長が存在した。そして、一般市民であるマカアイナナ (maka'āinana) は、アリエに任命された実質的なリーダーであるコノヒキ (konohiki) の下に集団的な食料生産に携わった⁽⁹⁾。アリエを除いては、アフプアア間の境界を超えた移動が基本的には認められていなかった上、境界を超えた交易も禁止されていたため、マカアイナナの暮らしは一つのアフプアア内で完結していた⁽¹⁰⁾。また、水は各アフプアア内で再利用されており、そ

(7) 地図の作成にあたっては、Google maps [<https://www.google.co.jp/maps>]、Community Partnership Center Foundation のウェブサイト [<http://www.cpc-foundation.org/model-projects.html>] および El-Kadi and Yamashita, "Modeling Streamflows and Flood Delineation," p. 236 を参照。川の形や海岸線などは簡略化している。

(8) Penny Levin, "Searching for Sustainable Agriculture in Hawai'i," in Jennifer Chirico and Gregory S. Farley eds., *Thinking Like an Island* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015), p. 47.

(9) Lauren C. Roth Venu, "Ecological Design for Island Water Systems," in Chirico and Farley eds., *Thinking Like an Island*, p. 132; Scott Fisher, "Hawaiian Culture and Its Foundation in Sustainability," in Chirico and Farley eds., *Thinking Like an Island*, p. 12.

(10) Levin, "Searching for Sustainable Agriculture in Hawai'i," p. 49.

の循環はハワイの主要な食物であるタロイモ、魚、海藻⁽¹¹⁾の効果的な生産にも寄与していた。さらに水には、ハワイの四大神の一人で生殖を司る男性神カネ(Kāne)の力が流れているために、神聖なものだと捉えられていた⁽¹²⁾。ところが入植者は、島の限られた資源を最大限に利用して食料を得るための水循環や、ハワイの精神世界における水の神聖さを尊重せず、自らの利益を追求するために川の流れを変え、水を大量に利用してサトウキビやパイナップルの栽培、牧畜などを推し進めた。結果として、アフプアア内での水の流れと食料生産サイクルは失われた⁽¹³⁾。

さらに、入植者がハワイの開発と観光化を進める過程において建設されたアラワイ運河も、ワイキキ地区の水の流れを変えた。そして同運河は、複数の面でワイキキ地区と周辺地域を地理的に分断する境界となった。第一に、アラワイ運河は、コオラウ山脈からマノア川、パロロ川、マキキ川を通じて海に注ぐ水の流れを分断した。そもそもワイキキという地名は、ハワイ語で水の湧く場所を意味する⁽¹⁴⁾。そして同地区は、元来、内陸部の山地から流れ込んだ水によって作られた湿地帯であった上、聖地としても崇められていた。そしてワイキキの岩礁に覆われた沿岸部は、カナカ・マオリの文化において高貴なスポーツであるサーフィンや海産物の採集に使われ、湿地では農業や魚の養殖が行われていた⁽¹⁵⁾。しかし現在のワイキキ地区は、その一部に聖地を残すものの、大半が観光施設に利用され、食料生産とは無縁の地となっている。第二に、アラワイ運河は、観光客の集中するワイキキ地区と現地の住民が暮らす近隣地区を分断する境界線となった。ワイキキ内外を往来するには、アラワイ運河の河口付近に架かった三つの橋のいずれかを渡るか、運河の始点、即ちワイキキ地区の南端から迂回するしかない。ワイキキ内外の人や物の往来を容易にする新たな橋の建設の是非は、ホノルル市と市民の間で長年に渡って議論されているものの⁽¹⁶⁾、未だに実現されていない。

本稿で取り上げるワイキキ水族館は、ワイキキ地区の南端にあるカピオラニ公園の一角に立地している(図2)。米国で二番目に古い公営の水族館として1904年に開館したワイキキ水族館は、1919年よりハワイ大学マノア校の研究施設の一部となり、1955年に開館当初

(11) Isabella Aiona Abbott, *Limu: An Ethnobotanical Study of Some Hawaiian Seaweeds*, 4th ed. (Lawai, Hawai'i: National Tropical Botanical Garden, 1996), p. 10.

(12) D. Kapua'ala Sproat, "Water," in Craig Howes and Jon Osorio eds., *The Value of Hawai'i: Knowing the Past, Shaping the Future* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2010), p. 189.

(13) Levin, "Searching for Sustainable Agriculture in Hawai'i," p. 47.

(14) Gaye Chan and Andrea Feeser, *Waikiki: A History of Forgetting & Remembering* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2006), p. 1.

(15) Chan and Feeser, *Waikiki*, pp. 25–26.

(16) Sara Mattison, "Resident Support Still Seem Mixed on Proposed Bridge over Ala Wai Canal," *KHON2 News* (March 28, 2019) [https://www.khon2.com/news/resident-support-still-seem-mixed-on-proposed-bridge-over-ala-wai-canal/].

の近隣の敷地から現在の場所に移転して運営を続けている⁽¹⁷⁾。同水族館は「太平洋の海洋生物への理解、感謝、およびそれらの保護に対する意識を引き起こし、促進する」⁽¹⁸⁾ことを理念としており、敷地は2.35エーカー（0.0095平方キロメートル）程である⁽¹⁹⁾。敷地面積から考えればその規模は小さいものの、同水族館は、水生生物の研究や保護活動の他に⁽²⁰⁾、観光客向けのトロリーバスも停車するワイキキ地区の主要なレジャー施設としての役割も担っている。同館の来館者は年間35万人に上る。そのうち3万2千人は地元の児童や学生であることから、同館が教育機能も担っていることが分かる⁽²¹⁾。ワイキキ水族館の展示においては、ワイキキ地区を訪れる観光客と、同地区周辺に居住する住民の両方を対象として、入植者到来以前のハワイの環境や文化の紹介がなされている。

2. ワイキキの観光地区化と従来の環境や文化の不可視化

ワイキキ水族館の特徴の一つは、ワイキキ地区という世界的な観光地に立地しているという地理的要因である。本章では、ワイキキの観光地区化に伴って、入植者到来以前の環境や文化が不可視化していった歴史的過程について述べる。

ポリネシア諸島から人類がハワイ諸島に移住を開始した時期には諸説ある。例えば環境保護の専門家であるペニー・レヴィンのまとめによると、先行研究においてその期間は紀元後300年から1,000年の間だとされている⁽²²⁾。考古学的な研究によれば、移住後にも現在のタヒチやトンガといった島々との間に海を越えた人の往来は続いていたが、ある時点で人や物の交流が途絶えた。ポリネシア諸島とハワイの接触が絶たれた理由は完全には明らかになっていないが、気候変動、両者の政治的な関係性の変化など、様々な説が唱えられている⁽²³⁾。そして、1778年にジェームス・クックらがハワイ諸島に到着するまでには、カナカ・マオリは独自の文化や社会を確立させており、島の資源も法や慣習に則って適切に管理されていた。

カナカ・マオリに関する法を専門とする法学者のD・カプアアラ・スプロートによると、ハワイは島嶼部であるために淡水資源に乏しいことから、ハワイの伝統的な社会において

(17) Waikiki Aquarium, “History” [<https://www.waikikiaquarium.org/about/history/>].

(18) Waikiki Aquarium, “Mission” [<https://www.waikikiaquarium.org/about/mission/>].

(19) Andrew Gomes, “Aquarium Thinks Big,” *Honolulu Advertiser* (March 4, 2007) [<http://the.honoluluadvertiser.com/article/2007/Mar/04/bz/FP703040345.html>].

(20) Waikiki Aquarium, “Projects” [<http://www.waikikiaquarium.org/conservation/projects/>].

(21) Chris Oliver, “Andrew Rossiter: 5 Things I Love about Waikiki Aquarium,” *Hawai‘i Magazine* (October 20, 2014) [https://www.hawaiimagazine.com/blogs/hawaii_today/2014/10/20/five_things_i_love_about_the_waikiki_aquarium_oahu_hawaii].

(22) Levin, “Searching for Sustainable Agriculture in Hawai‘i,” pp. 46–47.

(23) David A. Chang, *The World and All the Things Upon It: Native Hawaiian Geographies of Exploration* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2016), pp. 4–5.

水は共有材として管理され、個人的な所有は認められなかった⁽²⁴⁾。伝統的な土地区分であるアフプアアも、水の分布を考慮して定められた。ハワイ諸島における降水量は季節によって異なる上、貿易風の影響によって各島の北東部に雨が集中する⁽²⁵⁾。アフプアアは自給自足的なコミュニティであった。そして、各アフプアア内で利用できる水の量は、土壌の質といった他の要素と同様に食料生産量を左右するため、水が多い地域のアフプアアの面積は狭く、水が少ない地域の面積は広く設定されていたのである。その結果、各アフプアア内では、全住民に十分な食料が供給されていた⁽²⁶⁾。ワイキキも、アフプアアの一つであった。

入植者到来以前のハワイでは土地の私有が認められておらず、アフプアアの土地はコミュニティ全体のものとして利用されていた。しかし、入植者がすでに増加していたハワイ王朝後期の1848年には、マヘレ (Māhele) と呼ばれる法改正が実施され、土地の私有が認められた。多くの入植者が私有地を得た一方で、アフプアアの存続は困難となり、カナカ・マオリは生活の場を失った⁽²⁷⁾。現在、かつてのアフプアアの境界線には標識が建てられている (図3)。



図3 伝統的な土地区分におけるワイキキ内外の境界線を示す標識 (2019年10月に筆者が撮影)

なお、石組みを示す三角形の中央と右下に見られる模様は、無断で標識に貼られたステッカーによるものであり、標識そのもののデザインではない。

ハワイ諸島は1898年に米国領となった。米国の州となる1959年に至るまでの期間にも開発は着々と進められ、1926年にはホノルル港の灯台かつシンボリックな建物であるアロハ・タワーが完成した⁽²⁸⁾。現在もワイキキの高級ホテルとして知られるロイヤルハワイアンホテルも、アラワイ運河完成の前年にあたる1927年に営業を開始した⁽²⁹⁾。そして1920年代後

(24) Sproat, “Water,” p. 189.

(25) Venu, “Ecological Design for Island Water Systems,” p. 126.

(26) 山田亨「アフプアアの暮らし：コミュニティのかたち」山本真鳥、山田亨編『ハワイを知るための60章』明石書店、2013年、53–55頁；Fisher, “Hawaiian Culture and Its Foundation in Sustainability,” p. 14.

(27) Chang, *The World and All the Things Upon It*, pp. 150, 243–244.

(28) Edward D. Beechert, *Honolulu: Crossroads of the Pacific* (Columbia: University of South Carolina Press, 1991), p. 113.

(29) Beechert, *Honolulu*, p. 121; Chan and Feeser, *Waikiki*, p. 25.

半には、観光はパイナップルやサトウキビの生産に続いてハワイの経済活動を支える主要な産業となった⁽³⁰⁾。

観光を通じて、ハワイの文化や社会の限られた側面のみが世界に発信されていった。文化人類学者のジェーン・デスモンドは、20世紀初頭の観光にまつわる広告において、眩しい太陽や年間を通じて温暖な気候といったハワイの自然環境が宣伝されると共に、ハワイが東洋諸国への玄関口であること、即ち地理的条件においてハワイが米国の他の地域と異なることが強調されたと述べている。さらにデスモンドは、ハワイが西洋社会から見てエキゾチックかつ原始的な存在として描かれた上、都市化や近代化とは縁遠い真正で自然な状態の太平洋上の楽園だというイメージが醸成されたと続けている。また、1920年代以降の広告においては、カナカ・マオリはあたかも非文明的かつ原始的であるかのように描かれ、ステレオタイプ化されていったという⁽³¹⁾。実際のカナカ・マオリは、主に米国主流社会が作り出すイメージに手をこまねいたまま取り込まれていったわけではない。ハワイ語で書かれた新聞の記事では、ハワイの土地や社会への愛着や、ワイキキに並ぶホテルを始めとした外部の者が主導権を握る植民支配的な経済活動への反発が論じられた⁽³²⁾。観光地化する以前からハワイで暮らし、現地に溶け込んだ生活をしていた移民の中にも、同様の思いを持った人々はいたことであろう。

観光開発によって、ワイキキ地区の景観や住民の様子は大きく変化した。ハワイにおいては、伝統的に人工の養魚池で飼育された魚と、海で獲れる魚の両方が食されており、多くの養魚池が存在した。1901年に実施された調査によると、ワイキキに存在した15の養魚池の大半は、同年までにはカナカ・マオリではなく中国系移民によって経営され、地域に食料を供給していた⁽³³⁾。それらの養魚池と、そこで働いていた人々もまた、開発によってワイキキ地区から姿を消した。しかし、ワイキキ地区の観光地化に抗い、同地区での暮らしを守ろうとした人々もいた。前出した歴史学者のフィーサーによれば、アラワイ運河の建設が開始された後もワイキキからの立ち退きを拒否した一家がいた。この一家にとってワイキキにある住居や農地、鴨の泳ぐ池、そして祖先の眠る墓地には大きな思い入れがあった。しかし運河建設を担当した技術者は、報告書において、鴨の泳ぐ池は非衛生的なので埋め立てた方がよいし、観光客はアラワイ運河の美しさに満足することだろうと述べた。一方この担当者は、観光客はワイキキに最後に残った農地や池の見学を楽しんでいるとも書き残したという⁽³⁴⁾。つまり、観光産業に携わる人々が、現地の住民の生活の場から

(30) Jane C. Desmond, *Staging Tourism: Bodies on Display from Waikiki to Sea World* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1999), p. 4.

(31) Desmond, *Staging Tourism*, pp. 4–5.

(32) Desmond, *Staging Tourism*, pp. 36–37.

(33) Chan and Feeser, *Waikiki*, p. 33.

(34) Chan and Feeser, *Waikiki*, p. 27.

切り離された人工的な楽園としてのワイキキ作りに注力する傍らで、観光客の中にはハワイ諸島で脈々と受け継がれてきた文化に基づく日常生活の様子に関心を抱く人もいた。

現在のワイキキで目にすることができるのは、アスファルトで覆われた地面や、観光産業が再生産を続けてきた楽園としてのハワイ・イメージを体現する土産物の売店などであり、かつて流れていた川や食料生産の場、さらに同地域に代々暮らしてきた人々の姿ではない。観光産業はカナカ・マオリの参加する活動でもあり、彼らに経済的な利益をもたらしているのでは、という指摘もあろう。しかし、2012年時点においてカナカ・マオリが事業主である観光関連の会社の割合は僅か10%であることから分かるように、ハワイにおける観光産業の大部分はカナカ・マオリ以外の人々が担っている⁽³⁵⁾。地域の自然環境や先住民文化の存在が不可視化された現在のワイキキ地区においても、カナカ・マオリによって築かれた史跡を示す解説パネルは見られ、観光客を対象としたウォーキングツアーなども増加している。例えばハワイ州観光局が2018年に出版したガイドブックは、ワイキキの史跡を取り上げており、開発によって地中から掘り起こされたカナカ・マオリの遺骨を納めた納骨堂や、同地域を流れていた川の跡地、ハワイ王国時代の養魚池跡などが解説付きで地図上に示されている⁽³⁶⁾。しかし、それらの情報からは、カナカ・マオリやハワイ王国時代から同地で暮らしていた移民達が、一体どのようにワイキキ地区の環境を使用しながら生活してきたのか、そして彼らが現在どのような状況に置かれているのかを、十分に知ることはできない。

3. オアフ島における環境保護活動と文化復興活動

本稿の冒頭で述べた通り、カナカ・マオリはハワイにおける水の状況を熟知して、効果的に水を管理、利用すると共に、精神的な面でも水との間にいわゆる西洋社会とは異なる関係性を保ってきた。伝統的なカナカ・マオリの精神世界においては、自然の諸要素と人は家族のように相互に助け合う関係にある⁽³⁷⁾。また、人間はタロイモから生まれたとされていることから分かるように⁽³⁸⁾、人間は自然を支配するのではなく、自然の一部だと位置づけられている。そのため、ハワイにおいては、環境保護活動と文化復興活動は相互に関連しており、切り離せないものである。先の章で解説したように、ワイキキ地区においては入植者到来以前の環境や文化はほぼ不可視化されてしまったが、ワイキキ地区の外で

(35) Research and Economic Analysis, Division Department of Business, Economic Development and Tourism, State of Hawaii, *Native Hawaiian-Owned Firms in Hawaii's Tourism Sector*, (2017), p. 1 [http://files.hawaii.gov/dbedt/economic/reports/Native_Hawaiian_Owned_Business_in_Tourism.pdf].

(36) 『ワイキキの史跡を歩く』ハワイ州観光局、2018年[<http://ftp.htjapan.jp/HTJHawaii/AlohaProgram/Waikiki.pdf>].

なお、2020年3月11日現在、ハワイ観光局のサイトでは2019年版のブックレットに差し替えられている。

(37) Fisher, "Hawaiian Culture and Its Foundation in Sustainability," p. 9.

(38) Penny Levin, "Lessons from the Taro Patch," in Chirico and Farley eds., *Thinking Like an Island*, p. 82.

は環境保護活動や文化復興活動は活発に展開されている。

本章では、様々な活動のうち、特に活発に行われている養魚池とタロイモ畑の復興活動について述べる。ハワイ王国時代に盛んに利用されていた養魚池は、川から引き入れた水によって作られる浅い沼地であるタロイモ畑と密接な関係にあった。タロイモ畑から流れ出る養分を含んだ水は、養魚池に流れて魚を肥やした後、海に注いで天然の魚や海藻に栄養を届けた⁽³⁹⁾。同様に、養魚池から畑に流れた水は、タロイモや他の作物の養分となった⁽⁴⁰⁾。さらに、沿岸部で採れた海藻の一部は畑の肥料として利用され、食料生産サイクルの一部となった⁽⁴¹⁾。つまり、養魚池とタロイモ畑の両者が復興することによって、川や海を含めた環境全体が再生されると共に、農業や漁業に付随する文化活動も活発化するのが理想であると考えられる。ただし今日においては、養魚池、タロイモ畑をそれぞれ単体として復興させることは可能であるものの、流域の一部の地域が開発されている場合も多く、両者をつないで水循環に基づいた環境を再生させることは容易ではない。

3.1. 養魚池の復興

ハワイ古来の養魚池には、海岸の一部を囲って魚の出入りを防ぐもの、陸地に池を掘って淡水を貯めるものなど、複数の形がある⁽⁴²⁾。かつてワイキキに存在した養魚池は、現在ハワイ陸軍博物館も立地する公園となっており、本稿執筆時点においては復興される見込みはない⁽⁴³⁾。一方、ワイキキ地区から東に位置するホノルル市内の沿岸部では、非営利団体によって湧水と養魚池が保護されており、文化活動や教育活動に利用されている⁽⁴⁴⁾。ワイキキ地区から西に位置するホノルル市内、アイエア（‘Aiea）でも、非営利団体と米国海軍が協力して養魚池の復興活動に取り組んでいる⁽⁴⁵⁾。海軍のまとめた資料によると、パールハーバー周辺だけでも以前は20を超える養魚池が存在し、現在復興が進んでいるものは1327年から1473年の間に建設されたことが考古学的調査から明らかになっている⁽⁴⁶⁾。これら二つの養魚池は海岸の一部を囲う形のものである。

(39) Chan and Feeser, *Waikiki*, p. 5.

(40) Graydon “Buddy” Keala with James R. Hollyer and Luisa Castro, *Loko I‘a: A Manual on Hawaiian Fishpond Restoration and Management* (Honolulu: College of Tropical Agriculture and Human Resources, University of Hawai‘i, 2007), pp. 8–9.

(41) Sproat, “Water,” pp. 104–105.

(42) Graydon with Hollyer and Castro, *Loko I‘a*, pp. 9–10.

(43) Chan and Feeser, *Waikiki*, p. 42.

(44) Maunaloa Fishpond Heritage Center, “About Us” [<http://maunaloafishpond.org/about/>].

(45) ‘Aiea Community Association, “Loko Pa‘aiau Fishpond” [<https://www.aieacommunity.org/projects/loko-paaiau-fishpond/>].

(46) Naval Facilities Engineering Command, Hawaii, “Loko Pa‘aiau Fishpond McGrew Point Housing, Oahu, Hawaii, April 2016,” p. 2 [https://www.navfac.navy.mil/content/dam/navfac/NAVFAC%20Pacific/NAVFAC%20Hawaii/PDFs/Fact%20Sheets/Fact%20Sheet%20-%20Fishpond%20McGrew%20Point-FINAL_10May16.pdf].

上記に示したホノルル市内の養魚池よりもさらに進んだ取り組みをしているのが、オアフ島の東部に位置するカネオヘ市(図1)にあるヘエイア養魚池(He'eia Fishpond)である。800年近く前に作られたこの池は、2001年に設立された非営利団体のパエパエ・オ・ヘエイア(Paepae o He'eia)によって管理され、復興が進められている⁽⁴⁷⁾。ヘエイア養魚池が他の養魚池の復興活動と比較して特徴的なのは、海中に火山岩や珊瑚を積み上げて作られたかつての養魚池の形状を復元するだけでなく、復元した池を利用した魚の養殖を再開し、養魚池周辺のコミュニティに安全な食料を供給することを最終目的としている点である。カナカ・マオリの技術を利用した魚の養殖は本稿執筆時点で既に実験的に始まっている⁽⁴⁸⁾。

筆者は2016年にハワイで開催された国際先住民学会(Native American and Indigenous Studies Association)の大会に出席した折、学会主催のスタディーツアーとして、この養魚池の復興活動の一環であるマングローブ除去活動に参加した。この年には、まだ池の一部は強靱な根で養魚場の外壁を破壊する外来種のマングローブに覆われており、ボランティアの人々が膝まで泥に埋まりながらマングローブを根こそぎ撤去する作業に勤しんでいた。作業後に昼食を取りながら聞いた話によれば、オアフ島の食料事情に不安を抱く地域の住民は多い。仮に魚を例に挙げた場合、長くハワイで利用されてきた養魚池が機能していれば、島の住民に必要なある程度の量の魚が確保できる。しかし島の開発が進み、養魚池の多くは放棄されたり埋め立てられたりしてしまった。そして、船で沖に出て獲れる魚の量は限られているため、一般家庭の食卓に上る魚の多くは、島外で冷凍されて運ばれてきたものである。地域の食料自給能力は安全保障の重要な柱であると共に、食料を生産するために必要な知識や技術、そしてハワイの魚に関する知識は、まさにカナカ・マオリ文化の一部である。復元した養魚池は、遠くから眺める文化財ではなく、人が立ち入って地域の住民の食べる魚を育てる場にしたい、と非営利団体の担当者は語っていた⁽⁴⁹⁾。カネオヘ市や、ホノルル市内でもワイキキ地区の外部では、上記のような食料生産サイクルの復興とそれに伴う在来知を取り戻す試みがまさに今日進められている。しかし、観光施設が一面に立ち並び、地価も高いワイキキ地区においては、非営利団体が養魚場の跡地を買い取ることにすら難しい。

3.2. タロイモ畑の復興

ワイキキでもかつてはタロイモが生産されていたが⁽⁵⁰⁾、畑は開発に伴って姿を消した。しかし、ワイキキ地区の外では、農業の一環として、または人間の祖先でもある聖なる作物としてのタロイモを栽培するという文化活動、もしくは伝統的な農業を学ぶ教育的な活

(47) Paepae O He'eia, [https://paepaeohecia.org/].

(48) Paepae O He'eia, "Production" [https://paepaeohecia.org/production/].

(49) 2016年5月に筆者が国際先住民学会のスタディーツアーに参加した際に得られた情報による。

(50) Chan and Feeser, *Waikiki*, pp. 66–67.

動の一つとして、タロイモの栽培が続いている。

ワイキキ地区の北に位置するマノア地区には、ハワイ大学マノア校が立地している。同校のキャンパスの脇を流れるマノア川から水を引き入れて作られたのが、カ・パパ・ロイ・オ・カネワイ(Ka Papa Lo'i 'O Kānewai)というタロイモ畑である。山地から流れる水も豊富なマノア地区の土地は、かつては農地であったが、今日までに大学のキャンパスと閑静な住宅街に変わった。1980年代に、ハワイ大学マノア校で学ぶカナカ・マオリの学生達が、文化活動の一環としてタロイモ畑の復興に取り組み始めた。現在はハワイ大学マノア校ハワイ研究学部(Hawai'i nuiākea [School of Hawaiian Knowledge])が管理するこのタロイモ畑は、地域の人々にも開放され、タロイモの栽培を通じて入植者到来以前のマノア地区の環境、歴史、文化を学ぶ機会を広く提供している⁽⁵¹⁾。

しかし、かつてはマノア・パロロ川流域の一角を成していたワイキキ地区は、アラワイ運河の建設によって、同流域の水循環から切り離されてしまった。今日、カ・パパ・ロイ・オ・カネワイから流れる養分に富んだ水は、マノア川を通じてワイキキ方面に向かうものの、アラワイ運河を経て、レジャー用のヨットハーバーに「排水」として放出される。アラワイ運河が内陸部からの水を絶え間なく海に排出し、ワイキキ地区の湿地や養魚池が埋め立てられた現在、マノア・パロロ川流域の水循環や食料生産サイクルを復興させることは、極めて困難であるように見える。

4. マノア・パロロ川流域の環境や文化に関する展示の現状

これまでに述べた通り、ワイキキ地区の水の流れや環境は、アラワイ運河の建設によって大きく変容した。そして、マノア・パロロ川流域では、ハワイ大学マノア校のキャンパス内に作られたタロイモ畑であるカ・パパ・ロイ・オ・カネワイで環境や文化の復興活動が見られるものの、流域全体の環境を入植者到来以前の姿に戻すことは困難である。しかし、従来の環境や文化を、展示活動を通じて可視化し、地域の住民や観光客に紹介する試みは実施されている。そして展示活動を実施している施設は、相互に連携している。

ハワイ大学マノア校ハワイ研究学部の主導の元に2010年に始まった⁽⁵²⁾ウェリナ・マノア(Welina Mānoa)というプログラムには、マノア・パロロ川流域にある四つの施設が参加している⁽⁵³⁾。同プログラムに参加しているのは、ハワイ大学附属ライオン演習林(Lyon

(51) University of Hawai'i at Mānoa, Hawai'i nuiākea (School of Hawaiian Knowledge), "History" [<https://manoa.hawaii.edu/hshk/ka-papa-loi-o-kanewai/history/>].

(52) Welina Mānoa 公式 facebook ページ [https://www.facebook.com/pg/WelinaManoa/about/?ref=page_internal] 参照。

(53) Welina Mānoa に関する情報は <https://welinamanoa.org> に掲載されている。なお、同プログラムの facebook ページ [<https://www.facebook.com/WelinaManoa/>] によれば、このプログラムは2012年には活発に行われていたが、本稿執筆時の2019年12月においては休止状態にある。しかし、筆者の2019年2月の現地調査においては、参加各施設は同プログラムの存在を認識しており、活動の再活発化が待たれている。

Arboretum)、マノア遺跡センター (Mānoa Heritage Center)、前章で説明したタロイモ畑のカ・パパ・ロイ・オ・カネワイ、そしてワイキキ水族館である。ウェリナ・マノアに加盟する四つの施設の情報をまとめたパンフレットは、インターネット上で無料公開されている⁽⁵⁴⁾。マノア・パロロ川流域に興味を持つ人がそのパンフレットを手にとれば、広域な地域の環境や文化を理解するためにどの施設を訪問すればよいか分かる。さらに本パンフレットは、四つの施設のいずれかを偶然訪れた人々が他の施設を訪問する契機ともなり得る。

参加施設のうち、1919年に元の所有者から敷地を買い取って設立されたライアン演習林は⁽⁵⁵⁾、最も内陸部の山地に位置している。同演習林は屋外型の植物園で、山の斜面に植物が可能な限り自然の状態で栽培されている。また、演習林のすぐ脇に伸びる歩道は、マノア川上流のマノア滝に通じるトレッキングコースとして知られている。もちろん演習林内の通路は舗装されておらず、雨宿りする場所もない。よって、同演習林を訪問する観光客は、ある程度体力に自信のある人々だと考えられる。

ライアン演習林に植えられたハワイの植物は、いずれも解説パネルにおいて学名のみならずハワイ語名で紹介されている。さらに施設内の各解説パネルには、共通する14のマークのうちのいくつかが描かれている。各マークは、建材物、食料、漁業、儀礼といったように、カナカ・マオリによるその植物の利用方法が示されている⁽⁵⁶⁾。植物によっては、上記のマーク以外にも詳しい解説が加えられている。例えばタロイモの解説パネルでは、ハワイの神話におけるタロイモの意味や、環境保全におけるタロイモ畑の重要性が述べられている⁽⁵⁷⁾。つまり、ライアン演習林は、単に植物が栽培、展示されているだけではなく、各植物がカナカ・マオリの社会や文化、そしてハワイの環境の中で果たした役割を来園者に紹介している。

マノア遺跡センターは、ライアン演習林から溪谷をやや下った場所にあるマノア地区の高級住宅街の一角に立地する文化センターである。同センターも元々は1911年に建てられた個人の邸宅であったが、敷地内にカナカ・マオリの遺跡を有していた。邸宅を受け継いだ夫婦は、カナカ・マオリではなかったものの、地域全体の文化財としてのその遺跡の修復と保存に私財を投じ、2000年には国家歴史登録財としての登録を成し遂げた⁽⁵⁸⁾。国家歴史登録財となってからも、邸宅には所有者が居住している事情もあり、このセンターは大々的には観光客を受け入れていない。よって、センターへの来館者の大半は、地域の学校に通う子供達や、あらかじめ館内ツアーの予約を取った観光客、および地域の住民が占

(54) Welina Mānoa, “Welina Mānoa” [https://welinamanoa.files.wordpress.com/2012/09/trifold-forweb-copy.pdf].

(55) Lyon Arboretum, “Mission & History” [https://manoa.hawaii.edu/lyonarboretum/mission-and-history/].

(56) ライアン演習林の展示パネルによる(2019年2月に筆者の実施した現地調査において内容を確認した)。

(57) 同上。

(58) Mānoa Heritage Center, “Cooke Family History and Kūali‘i” [https://www.manoaheritagecenter.org/cooke-family-history-kuali%CA%BBi/].

めている。

敷地内にあるクカオオ・ヘイアウ (Kūka‘ō‘ō Heiau) という名の遺跡は、豊かな水を湛え、タロイモを初めとした様々な作物が栽培されていたマノア溪谷における祈りの場であった。同時にこの遺跡は、山から海に至る溪谷全体を見渡すことのできる軍事的要所でもあった⁽⁵⁹⁾。来館者を対象としたツアーでは、邸宅内の広い庭で栽培されているハワイの植物に関する解説を受けると共に、遺跡を見学し、さらには敷地の一角にある部屋でカナカ・マオリの工芸品に触れることができる⁽⁶⁰⁾。また、カナカ・マオリの文化に関する講演会や、工芸品を製作するワークショップも、センターで定期的実施されている⁽⁶¹⁾。つまり来館者は、遺跡を見るだけでなく、マノア溪谷内の水の流れや農業の歴史、そして植物に関する知識を得たり、カナカ・マオリの文化を学んだりすることができる。

5. ワイキキ水族館の役割と特徴

前章までに紹介したウェリナ・マノアに参加する施設を比較すると、ワイキキ水族館には次のような特徴がある。第一に、同水族館は、ワイキキ地区に最も近く、公共のバスや観光トロリーを利用したアクセスが容易であるために、観光客にとって訪れることが最も容易である。第二に、他の施設は屋外スペースを主な活動の場としているために、子供や高齢者、障害者など、地面の段差や滑りやすさなどに配慮が必要な人々が訪問することは難しい一方で、水族館はベビーカーや車椅子に乗ったままでも楽しむことができる。第三に、他の三つの施設はマノア・パロロ川流域の陸と川に着目した活動を行っているが、ワイキキ水族館は海の環境を中心とした活動を実施している。

5.1 水族館の機能と役割

また、一般的に水族館は水生生物を展示しているだけの施設であると思われがちだが、実際にはさらに大きな機能を持っていることも、特筆すべき事項である。水族館学⁽⁶²⁾の専門家である鈴木克美と西源二郎によると、社会的ニーズに応じて水族館は変化してきた⁽⁶³⁾。人間が海洋生物を捕らえて飼育した事実は紀元前の古代シュメール文明や周代の中国の文

(59) Mānoa Heritage Center, “Kūka‘ō‘ō Heiau” [https://www.manoaheritagecenter.org/kuka%CA%BB%CA%BB%heiau/].

(60) 2019年2月に筆者の実施した現地調査による。

(61) Mānoa Heritage Center, “Ma Ka Hana Ka ‘Ike Workshops” [https://www.manoaheritagecenter.org/2019/11/ma-ka-hana-ka-ike-workshops-2-2-3-2-3-2/].

(62) 水族館の活動は、展示に関する学際的な研究を担う博物館学においても論じられている。しかし、水族館には水生生物の飼育やそれらの生態に関する研究といった、博物館や美術館には見られない独自の活動がある。水族館の社会的意義や展示の在り方、水生生物の研究や水槽の管理、レクリエーションやエンターテインメントなど、水族館の活動に特化した諸活動にまつわる研究領域は水族館学と称されている。鈴木、西『新版水族館学』、12-18頁。

(63) 鈴木、西『新版水族館学』、4頁。

献にも記録されており、19世紀半ばのイギリスでは、人々が海洋生物を採集し、ガラス器に入れて飼育することが流行した⁽⁶⁴⁾。1853年にはロンドン動物園の一角にフィッシュハウスと呼ばれる水槽を並べた施設が開館し、それが人々に支持されると、展示用小水槽を並べた水族館がヨーロッパ全土に広まった⁽⁶⁵⁾。大型水槽や濾過装置の普及に伴って、水族館は徐々に大型化すると共に⁽⁶⁶⁾、非営利組織として環境を紹介する場であるという理解が一般化した⁽⁶⁷⁾。さらに、米国においては、水族館には営利的、かつショー的な要素が取り入れられ、娯楽、教育、研究、環境保護を両立する施設へと変化した⁽⁶⁸⁾。

また、西洋文化史学者の溝井裕一は、現代の水族館は、水生生物を眺めるだけの受け身型の施設から、水中生物との交流型の施設に変わったと論じている。タッチプールと呼ばれる浅い水槽を設置し、生物に直接触れる機会を提供することや、イルカやシャチのショーに来館者を参加させるといった工夫は、交流型を目指す施設の特徴である⁽⁶⁹⁾。さらに溝井は、水中ロボットやプロジェクション・マッピングを利用して、自然物と人工物の境界を超え、ハイブリッド化した展示の方法を模索している水族館もあると指摘している⁽⁷⁰⁾。

ワイキキ水族館も、水中世界との交流を展示の中に取り込んでいる。上の議論を踏まえれば、タッチプールでの生物との触れあいは、その一例として指摘できよう。「リーフの淵(Edge of the Reef)」と名付けられた容量としては28,400リットル程の同水族館のタッチプールは、屋外に設置されている。その中では、ハワイ周辺海域の浅瀬に住む生物が飼育され、生物の生態に関する講習を受けたボランティアが来館者の質問に答えたり、子供がヒトデやウニといった生物に触れる手助けを行ったりしている⁽⁷¹⁾。しかし、ワイキキ水族館は、全般的には水中生物と人間を積極的に交流させず、生物をショー的な娯楽のためには利用していない。歴史を振り返れば、ワイキキ水族館でイルカが飼育され、屋外のプールでショーが開催されていた時期もあったが⁽⁷²⁾、現在ではイルカは同水族館で飼育されていない。人間によって救助され、野生に返すことのできないハワイ・モンク・アザラシは、現在屋外のプールで飼育されているものの、観客はアザラシに触れることはできず、アザラシはショーのための芸も教えられていない⁽⁷³⁾。また、水中ロボットやプロジェクショ

(64) 鈴木、西『新版水族館学』、19-20頁。

(65) 鈴木、西『新版水族館学』、23-25頁。

(66) 鈴木、西『新版水族館学』、25-26頁。

(67) 鈴木、西『新版水族館学』、29頁。

(68) 鈴木、西『新版水族館学』、37-40頁。

(69) 溝井裕一『水族館の文化史：ひと・動物・モノがおりなす魔術の世界』勉誠出版、2018年、228-229頁。

(70) 溝井『水族館の文化史』、316-323頁。

(71) Waikiki Aquarium, "Edge of the Reef Exhibit" [<https://www.waikikiaquarium.org/experience/exhibits/edge-of-the-reef/>].

(72) Waikiki Aquarium, "History" [<https://www.waikikiaquarium.org/about/history/>].

(73) Waikiki Aquarium, "Hawaiian Monk Seal Habitat" [<https://www.waikikiaquarium.org/experience/exhibits/hawaiian-monk-seal-habitat/>].

ン・マッピングの取り入れも見られない。

5.2 陸と海のつながりや文化を踏まえた展示活動

しかし、ワイキキ水族館は、先に挙げた観客のショーへの参加やハイブリッド化とは異なる方法で、新たな形の展示を目指している。具体的には、陸と海のつながりを踏まえ、文化的な要素を取り入れた解説を行い、地域の自然環境を総合的に理解できる展示を目指している。以下にその方法を述べる。

第一に、展示への植物の取り入れである。ワイキキ水族館の展示スペースは、屋内と屋外がおおよそ半分ずつの割合を占めている。そして、屋外のスペースを利用して作られた「ハワイ文化の庭(Hawaiian Cultural Gardens)」において、ハワイで育つ植物が栽培されている。ハワイ文化の庭に立てられた解説パネルには、オアフ島と思われる島を横から見た絵が描かれ、山、川、海がつながっている様子が図解されている。なお、ハワイ文化の庭の隣に設置された、アマアマ(‘Ama‘ama、和名ボラ)飼育用の屋外水槽には、ハワイの伝統的な養殖池に関する情報を記したパネルも併設されている⁽⁷⁴⁾。

第二に、植物と水中生物を関連付けた展示の実施である。上に示した屋外スペースで栽培されている植物は、解説パネルにおいて、ラテン語の学名や英語の名称と共にハワイ語の名称で紹介され、その種を取り巻く文化に関する情報も合わせて解説されている。例えば、和名ではハワイトモモと呼ばれる植物のうち、黄色の花をつける個体は、ハワイ語名でマモ(Mamo)と呼ばれている。マモは、ハワイアンサージェントというハワイ固有種の魚の名称でもあり、マモの前に立てらえたパネルでは、植物のマモと魚のマモが並べて表示されている。ハワイ語でロウル(Loulou)と呼ばれるシュロのような椰子に関するパネルでも同様に、同名で呼ばれるソウシハギという魚の写真が示されている。このように、魚と植物がハワイ語において同じ名前を共有する場合があるのは、両者が色彩や形状に類似性を持つからである。植物のマモの花は放線状の花弁を持ち、魚のマモの体に入った縦縞はそれに似ている。また、魚のロウルの尾びれは、植物のロウルの葉と似た形をしている⁽⁷⁵⁾。上記の解説文から、来館者は、カナカ・マオリが生物学的な分類とは異なる基準をもってハワイの動植物を理解してきたと知ることができる。2016年からは、解説パネルに記された植物と文化に関する解説を記したリーフレットの配布やオーディオガイドの提供も開始された⁽⁷⁶⁾。

第三に、水中生物の陸上における姿の展示への取り入れである。カナカ・マオリに

(74) 2019年2月に筆者の実施した現地調査による。

(75) 同上。

(76) Waikiki Aquarium, “Waikiki Aquarium Unveils New Self-Guided Hawaiian Plant Tour” [<https://www.waikikiaquarium.org/waikiki-aquarium-unveils-new-self-guided-hawaiian-plant-tour/>].

とって、珊瑚は生物学的に重要であるのみならず、ハワイの創世神話であるクムリポ (Kumulipo) において地球上で最も早く生まれた生物は珊瑚だとされていることから⁽⁷⁷⁾、文化的にも大きな価値を持っている。ワイキキ水族館の一角にある珊瑚の展示コーナーは、2019年2月にリニューアルされた。新たな展示においては、水中で見られる生きた珊瑚と、珊瑚の骨格や宝飾品に加工される前の宝石珊瑚が並べて展示されている⁽⁷⁸⁾。ハワイの海では、磯遊びやシュノーケリングにも適した比較的水深の浅い場所においても珊瑚を見ることができる。それでもなお、ハワイでの時間の大半を陸上で活動に費やす観光客や、ハワイで暮らしながらも海で泳いだりしない人々は、生きた珊瑚の姿を見ることはない。主に陸上で時間を過ごす人々が目にする機会があるのは、死んだ後に砂浜に打ち上げられた珊瑚の白い骨格や、指輪やネックレスなどに加工されたピンクや黒の珊瑚の欠片である。それらは生きた珊瑚とは色も質感も異なっているため、同じ生物だと認識することは難しい。しかし、生きた姿と陸上で見かける姿の両方が並べて展示してあれば、海で泳がない人々が珊瑚の生態を知り、さらにはハワイの環境や文化に対する理解を深めるきっかけを創出し得る。

ワイキキ水族館におけるハワイの環境や文化に関する展示の取り組みは、30年以上前にすでに始まっていた。1981年にワイキキ水族館から出版された『ハワイ人と海 (Hawaiians and the Sea)』というリーフレットは、ワイキキ水族館とホノルル市内のビショップ博物館との連携の下に同年2月にオープンした展示を基にして出版された⁽⁷⁹⁾。そのリーフレットの冒頭には、次のような記述が見られる。

ハワイ人は、陸と海の両者を利用して食料を得てきた。両者を利用することによって複雑な文化が生み出され、その中では土地と海洋が対として理解された。両者を構成する要素は、互いに浸透し合った。

大陸部の文化においては、土地と海洋は往々にして異なる要素である。土地は母なる持続的なものであり、海洋は恐ろしく暴力的なものである。しかし、航海士マゼランが彼の敵だと見た海を、ハワイの酋長達は彼らを養ってくれる存在だと考えた⁽⁸⁰⁾。(拙訳)

このリーフレットでは、ハワイの伝統的な海の利用法が解説されており、その中に登場する水生生物のうちワイキキ水族館で飼育されているものには印が付けられている。さらにこのリーフレットでは、ハワイ社会においては、陸上と海が一体となった地域が適切に管理、利用されてきたことや⁽⁸¹⁾、精巧な造りの養魚場がタロイモ畑とも連携しながら魚を

(77) Queen Lili'uokalani, *The Kumulipo: An Hawaiian Creation Myth* (San Francisco, California: Pueo Press, 1978), p. 2.

(78) 2019年2月に筆者の実施した現地調査による。

(79) Leighton Taylor, *Hawaiians and the Sea* (Honolulu, Hawai'i: Waikiki Aquarium, 1981), p. 25.

(80) Taylor, *Hawaiians and the Sea*, p. 1.

(81) Taylor, *Hawaiians and the Sea*, p. 10.

養ってきたこと⁽⁸²⁾、ハワイ伝統的な宗教において陸と海のつながりを体現するロノ (Lono) という神の存在などが論じられている⁽⁸³⁾。米国内の水族館は1960年代までは娯楽的な側面と営利追求を重んじていたが、その後は研究や教育活動および環境保護に力点を移したとされている⁽⁸⁴⁾。ワイキキ水族館もその流れの中にあり、1980年代までには環境や社会に関する問題を取り上げる施設になっていたと考えられる。

水族館の展示における陸上の要素の取り入れは、ハワイ州内の別の水族館でも行われている。マウイ島南部の港町であるマアラエア (Ma'alaea) に立地するマウイ・オーシャンセンター (Maui Ocean Center) においても、屋外スペースでハワイの植物が栽培されている。筆者が同センターを訪問した2019年2月の時点では、カナカ・マオリの職員によって植物の伝統的な利用法の実演と解説が行われる一時間程のツアーも開催されていた⁽⁸⁵⁾。また、展示の中にも伝統的な養魚場や漁撈に関する情報が盛り込まれ、園内の一角にはカナカ・マオリが漁に出る際に祈りを捧げる祭壇が設けられている様子⁽⁸⁶⁾からは、同センターがハワイの歴史や文化に敬意を払いながら展示活動を実施していることが分かる。しかし、ワイキキ水族館は、マノア・パロロ川流域全体の環境に着目し、同流域内に位置する他の団体と連携している点で、マウイ・オーシャンセンターと異なっている。

さらに、入館料を比較しても、マウイ・オーシャンセンターとワイキキ水族館には大きな違いが見られる。マウイ・オーシャンセンターの入館料は、大人34ドル95セント、子供24ドル95セントであるが、ワイキキ水族館は大人12ドル、子供は無料となっており、地域の住民にも利用しやすい。本稿の冒頭で取り上げた、博物館学の専門家であるゲイル・デクスター・ロードとナイリー・ブランケンバーグは、地域の人々の参加は、展示活動から社会を変革するソフト・パワーを生み出す際に欠かせないと述べている⁽⁸⁷⁾。施設を維持するための費用を工面することは、どの展示施設にとっても大きな課題である。しかし、展示を通じてマノア・パロロ川流域やワイキキ地区の歴史を広く紹介し、地域の自然環境やそれに付随した文化のさらなる不可視化を防ぐためには、入館料を地域住民が繰り返し来館できる金額に設定し、彼らと水族館の間に密接な関係性を生み出すことが不可欠である。

(82) Taylor, *Hawaiians and the Sea*, p. 12.

(83) Taylor, *Hawaiians and the Sea*, p. 14.

(84) 鈴木、西『新版水族館学』、44頁。

(85) 本稿執筆時の2019年12月においてマウイ・オーシャンセンターのウェブサイトを確認したところ、植物に関するツアーの情報は見当たらなかった。

(86) Maui Ocean Center, *Souvenir Guidebook* (Honolulu, Hawai'i: Mutual Publishing, 2016), p. 23.

(87) Lord and Blankenberg, "Introduction: Why Cities, Museums and Soft Power," p. 22.

5.3 境界理論からみた水族館の社会的役割

地理的な境界にまつわる事象は、学際的な研究によってより深く理解されてきた。地域の環境や文化を分断したアラワイ運河を境界線として捉えた場合、ワイキキ水族館の活動はいかに理解できるだろうか。

米墨国境地域に関する研究者のオスカー・J・マルチネスは、国境を挟んだ二国の関係性を、疎外、共存、相互依存、統合の四つに分けて類型化した。現在マルチネスの提起した四類型は、国境以外の地理的境界を挟んだ地域の関係性や、地理的境界とは無関係な集団の関係性を論じる際にも応用されている。マルチネスの四類型を簡略に説明すると、疎外の段階においては二国の間に全く交流がない。共存の段階では国境を越えた多少の交流が生じ、国民も互いのある程度認識するようになる。そして、相互依存段階になると、国境を越えた交流が進んだ上に、両国民の間に友好的な協力関係が生じる。さらに統合段階に移行すると、両国間の交流は継続的かつ制限のないものとなり、両国民は互いを一つの集団の一員だと考えるようになる⁽⁸⁸⁾。

マルチネスの四類型を使うと、ワイキキ水族館の社会的役割は、以下のように理解できる。まずは、マノア・パロロ川流域の陸に関する展示を行う施設と、海に関する展示を行う施設の関係性である。ウェリナ・マノアの活動開始以前は、アラワイ運河以北に立地し、陸の自然や文化を紹介する他の三つの施設と、ワイキキ水族館の関係性は、共存関係にあった。なぜなら、それぞれの施設は互いに存在を認識してはいたものの、協力関係は築かれていなかったためである。しかし現在は、アラワイ運河を超えて友好的に協力し、マノア・パロロ川流域の環境や文化の紹介に取り組んでいることから、相互依存段階にあるように見える。ウェリナ・マノアを主導したのはワイキキ水族館ではないが、本来であれば海に関する展示に注力する立場にある水族館が、陸上の自然やそれにまつわる文化に関する情報を取り入れたことは、施設間の連携の円滑化に貢献したと考えられる。なお、四つの施設のうち三つはハワイ大学の付属施設であるが、マノア遺跡センターの運営母体は別である上、各施設の活動内容も異なっていることから、これらの施設の関係性は統合段階には移行しないと考えられる。

そして、マノア・パロロ川流域の地域住民と観光客の関係性である。ワイキキ地区とそれ以外の地区はアラワイ運河で隔てられており、観光客と地域住民が完全に隔離されている訳ではないものの、観光客はアラワイ運河より海側、地域住民はアラワイ運河よりも山側で過ごすことが多い。また、休暇を楽しむ観光客と日常生活を送る地域住民の行動パターンは大きく異なっており、両者が何らかの活動を共にすることは少ない。よって、基本的には観光客と地域住民は多少の交流を持つ共存関係にあると考えられる。一方、地理的

(88) Oscar J. Martínez, *Border People: Life and Society in the U.S.-Mexico Borderlands* (Tucson and London: The University of Arizona Press, 1994), p. 7.

にもワイキキ地区からやや南東に外れ、観光客と地域住民の両者にとって訪れやすい場所に位置しているワイキキ水族館は、娯楽を求める観光客と教育的要素を求める地域住民の両者に対して開かれた場となっている。つまり、ワイキキ水族館は、観光客と地域住民の交流を促し、両者の関係性を友好的な相互依存段階に進める空間となり得る。

ワイキキが観光地区である限り、マノア・パロロ川流域においては養魚池やタロイモ畑の復興にも多くの制約があり、環境や文化を完全にかつての形に戻すことは難しい。また、アラワイ運河の存在により、内陸部から海に注ぐ水の流れの継続性を取り戻すことも難しい。しかし、複数の施設が連携しながらマノア・パロロ川流域の自然環境や文化を可視化し、地域住民と観光客が共にワイキキ地区のあり方を再考できれば、陸、川、海を含めた自然環境やそれにまつわる文化の保護、復興に向けた実現可能なアイディアの発案につながる事が期待できる。すなわち、ワイキキ水族館は、水生生物の展示を超えた社会的役割を果たし得る施設なのである。

おわりに

これまでに述べてきたように、ワイキキ水族館は、アラワイ運河を超えて広がるマノア・パロロ川流域の環境のつながりを可視化し、それにまつわる文化の復興を促すという面において、重要な役割を果たしている。先の部分で、今日の水族館の役割は、娯楽、教育、研究、環境保護であると述べた⁽⁸⁹⁾。しかし、ワイキキ水族館の活動を踏まえれば、文化復興も現在の重要な役割として位置づけられることが分かる。

歴史学者のアンドレア・フィーサーは、ワイキキ地区に流れていた恵み豊かな水が、運河を通じた排水や埋め立てなどによって同地区から取り除かれた歴史を、植民地主義と資本主義によってワイキキ地区とそこに暮らしていた人々にもたらされた苦難の象徴だと評した⁽⁹⁰⁾。つまりフィーサーは、カナカ・マオリがワイキキの外に追い立てられ、入植者主導の観光開発が進められた歴史を、水にまつわる歴史と重ね合わせているのである。文化人類学や先住民研究の分野においては、入植者や支配者の視点に基づいた思考や行動から脱すること、即ち脱植民地化(decolonization)の重要性が繰り返されているものの、それを社会の中で具現化し、行動に移すことは、非常に難しい。しかしワイキキ水族館は、他の施設との連携や、植物に関する展示の実施、カナカ・マオリの文化に関する解説の取り入れという形で、未だにカナカ・マオリが周縁化されているハワイにおいて、脱植民地化を体現する地道な活動を実践している。

アラワイ運河の建設に代表される、ハワイの陸と海の分断や、それに伴う文化や知識の断片化、不可視化に対して、今後どのような活動が展開されていくのかは、本稿執筆時点

(89) 鈴木、西『新版水族館学』、37-40頁。

(90) Chan and Feeser, *Waikiki*, p. 1.

では明らかでない。ワイキキ水族館の活動に限って述べれば、現在マノア・パロロ川流域に絞って行われている他施設との連携を、マキキ川流域やアラワイ運河流域にも広げ、広域アラワイ運河流域の環境や文化を可視化することも可能かもしれない。しかし、筆者の知識が及ぶ限りにおいては、アラワイ運河流域には、環境や文化の展示に関連する施設は存在しない。マキキ川流域には、ホノルル美術館別館のスポルディングハウス (Spalding House) が立地しているものの、スポルディングハウスは売却されることが発表されている⁽⁹¹⁾。今後、観光スポットを兼ねた新たな展示施設が開館した場合には、状況は変化する可能性がある。

気候変動や観光客の増加、都市化に伴って、ワイキキ地区を取り巻く環境は急速に変化している。アラワイ運河に関しては、同地区の洪水被害を防ぐために、米国政府の予算のうち2億1,200万ドルをつぎ込んだ改修が予定されており、改修の折には運河の両側に一メートル20センチ程の壁が建てられると報道されている⁽⁹²⁾。壁の建設は、人々を災害から守る手段ともなるが、地理的な分断の強化にもつながり得る。さらに、海面の上昇等に伴って浸食の続くワイキキビーチについても、ハワイ州政府が1,300万ドルの予算を支出して、2019年秋に補修を開始することが決まっている。そもそもワイキキビーチがほぼ人工的に作られたことを考えると、防波堤の設置やさらなる砂の投入を行ってまで保護すべきなのかという議論もあろうが、ハワイ州を訪問する人々の六割に相当する年間590万人の旅行者をワイキキが受け入れていることを考慮すれば、消滅させるわけにはいかないという事情がある⁽⁹³⁾。ワイキキビーチの改修によってオアフ島の自然環境にいかなる影響が及ぶかは、筆者の専門知識をもっては予測し難いものの、環境破壊や文化の不可視化を促進し、地域の人々にさらなる負担と苦痛をもたらすものであってはならないように感じる。

現在はワイキキ地区と他の地区の地理的な境界線として機能しているアラワイ運河のあり方や、島の溪谷から観光のメッカであるワイキキの海に注ぐ水の流れのあり方、そしてそれらを取り巻く環境や文化に対する人々の対応には、今後も変化が続くことが予想される。地域の環境や文化に着目した観光が世界的に評価される今日において、今後ハワイ内外からワイキキ地区に集う観光客がどのような役割を果たすのか、という点も、注目に値

(91) Nina Wu, “Honolulu Museum of Art to Sell Historic Spalding House in Makiki,” *Star Advertiser* (July 16, 2019) [<https://www.staradvertiser.com/2019/07/16/breaking-news/honolulu-museum-of-art-to-sell-historical-spalding-house-in-makiki/>].

(92) Nina Wu, “U.S. Senate Approves More Than \$200M for Ala Wai Canal Improvements,” *Star Advertiser* (October 10, 2018) [<https://www.staradvertiser.com/2018/10/10/breaking-news/u-s-senate-approves-more-than-200m-for-ala-wai-canal-improvements/>].

(93) Janine Puhak, “Hawaii Invests \$13 Million to Repair State’s Most Visited Beach,” *Fox News* (June 11, 2019) [<https://www.foxnews.com/travel/hawaii-invests-13-million-repair-states-most-visited-beach>].

する。エコツーリズムや文化ツーリズムを通じて、カナカ・マオリの観点からハワイを紹介するツアーや、環境や文化の保護、復興活動への観光客の参加はすでに始まっている。それらがマノア・パロロ川流域の環境保護や文化復興にどの程度寄与しているのかという議論は、次の論文に記すこととしたい。

(付記) 本研究は、2018年度公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団国内研究助成(萌芽的研究)、および2019年度日米教育委員会(フルブライト・ジャパン)フルブライト研究員プログラム(受け入れ機関ハワイ大学マノア校アメリカ研究科博物館学コース)の支援を受けて実施された。

